文化情報資源としての留学生活用の可能性
―留学生による自作紙芝居読み聞かせ活動を通して―

Possibility of international students' practical use as culture information source: Through the activity that international students read their Picture-card shows to kindergarteners

篠﨑　大司（別府大学・文学部）
Daishi SHINOZAKI（Faculty of Literature, Beppu University）

要　旨

大学における留学生と日本人学生、あるいは留学生と地域との交流の必要性、重要性が叫ばれてからすでに久しく、また多くの実践報告もなされてきた。しかし、様々な阻害要因によって、必ずしもスムーズに交流活動が行われているわけではない。そこで筆者は、留学生を地域社会に新たな文化を提供する「文化情報資源」と位置づけ、留学生自らが自国の昔話を題材とした紙芝居を作成し、幼稚園で読み聞かせをするという一連の作業を通して、日本人学生や地域社会との交流を目指したプログラムを実施した。本稿では、この取り組みを概観し、留学生のレポートの分析なども踏まえながら、文化情報資源としての留学生の社会貢献の可能性を探っていく。
［キーワード：留学生、地域交流、紙芝居読み聞かせ、文化情報資源、幼稚園］

Summary

Although the importance of interactions between foreign students in Japan and Japanese students, as well as exchange between foreign students and the native community around them are often studied and reported on, and the value of such interactions have long been well-known, there still remain various impediments that keep these exchanges and activities between foreign students and their Japanese counterparts and communities from going smoothly.

Here, the author defines a "cultural information source" as foreign students imparting new cultural information to the community around them through various activities; for example by participating in projects such as making traditional Japanese Picture-card shows using folktales from their own countries, and then presenting these to local Japanese kindergartens. One goal of a series of such projects is, of course, furthering interaction between foreign students and their local Japanese community.

In this report, based on a general survey of such interactive activities, analysis of the foreign students' project reports, and so on, I will discuss the possibilities for social contributions by foreign students as a "cultural information source".
［Key words : foreign students, native community, reading traditional Japanese Picture-card, cultural information source, kindergarten］

目　次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．授業のねらい
　1．日本人との相互交流
　2．文化情報資源としての留学生の位置づけ
　3．留学生の日本語力と学習動機の向上
　4．日本事情教育としての日本理解と自文化理解
Ⅲ．実践報告
　1．授業の概要
　2．スケジュール
　3．考察－受講生のレポートから
Ⅳ．授業を超えた地域交流への展開
　1．実施までの経緯
　2．交流活動の概要
　3．活動の内容
　4．考察
Ⅴ．まとめ

Ⅰ．はじめに

大学における留学生と日本人学生、あるいは留学生と地域との交流の必要性、重要性が叫ばれてからすでに久しく、また多くの実践報告もなされてきた。その背景には、国内における留学生を始めとした外国人数の増加があるが、そればかりでない。日本人学生と留学生の間において、言葉の壁や心理的な抵抗感・無関心、互いの情報不足などが相互交流の妨げとなって（横田（1991））、自然発生的な交流活動はなかなか期待できないという現状がある。そのため、専門家による何らかの仕掛け作りが求められている。

筆者が勤める大学においても、2001年度より学科内に本科日本語課程（以下、日本語課程[1]）を設置し、集中的な日本語教育プログラムを実施し、かなりの成果をあげている。しかし、留学生の日本語力を短期間に引き上げるべく集中的なプログラムを組むと、日本人学生や一般の日本人および日本社会と接する機会を相当程度奪ってしまうのも事実である。これは、留学生の異文化理解の機会が満たされていないというだけでなく、地域住民としての彼らの存在意義も十分発揮されていないことをも意味するものであり、中長期的に見て決して望ましい状況とはいえない。

そこで筆者は、留学生を地域社会に新たな文化を提供する「文化情報資源」と位置づけ、留学生自らが自国の昔話の紙芝居を作成し、幼稚園で読み聞かせをするという一連の作業を通して、日本人や地域社会との交流と、地域における留学生の存在意義の向上を目指したプログラムを実施した。

本稿では、この取り組みを概観し、留学生のレポートの分析なども踏まえながら、文化情報資源としての留学生の社会貢献の可能性を探っていく。

Ⅱ．授業のねらい

今回の活動のねらいは、以下の４点である。第一に、留学生をできるだけ多くの日本人に主体的に接触させ人的交流の輪を広げる。第二に、文化情報資源としての留学生を日常的な地域活動に最大限活用することで、留学生の地域における存在意義を見出し、高める。第三に、通常の日本語学習とは違う生の日本語および学習の場を提供することによって、日本語に対する視野を広げ、学習のモティベーションをあげる。第四に、日本社会との接触等を通して、日本事情教育における日本理解、さらに自文化に対する理解を促す、である。以下、具体的に述べる。

１．日本人との相互交流

横田（1991）は、「日本や日本人との間に心にのこる深い出会いが体験されること（p81）」が留学への満足度を高めるために必要であると指摘している。

本授業では、紙芝居作成を通じて芸術文化学科の学生と、プレゼンテーションの練習を通して国文学科の学生と、そして読み聞かせや共に遊ぶことによって幼稚園園児たちと、継続的な相互交流が図れるよう授業を設計した。特に前二者については、紙芝居の作成および音読練習という明確な作業目標を設定することによって、比較的容易に相互交流が行われるよう配慮した。

２．文化情報資源としての留学生の位置づけ

地域社会や日本人との接触において、留学生の最大の強みは日本と異なる文化やアイデンティティーを持っているということである。筆者は、とりあえず文化を「生活を豊かにする情報の束」と位置づけ、留学生がその情報を効果的に日本人に提供することで、留学生の存在意義の向上を目指した。

ただし、その情報が特殊技能（例えば、自国の伝統舞踊）や得手不得手（例えば、料理）に関するものは、留学生全員の参加が難しくなる可能性があるという点で必ずしも望ましいものではない。

そこで、今回はそのような支障が少なく、誰もが聞いた経験があると思われる自国の昔話の読み聞かせを取り上げた。

３．留学生の日本語力と学習動機の向上

本授業の受講生は、普段は国文学科の中にある日本語課程に所属し、週15コマの日本語集中プログラムを受講している。これにより、専門的・学術的活動に堪えうるだけの日本語力あるいは様々な日本語関連の試験に合格できるだけの日本語力が養成されるわけである。しかし、このことは同時に、日本語教育関係者以外の日本人と接触する機会を相当程度奪っていることを意味し、「自分の日本語が一般の日本人にどの程度通用するのか。」という部分での実体験が得にくい環境となっている。

そこで、本授業では「園児が分かる日本語力の養成」という、極めて現実的で説得力があり、なおかつ瞬時にフィードバックが得られる目標を掲げて受講生の日本語指導に努めた。具体的には、原稿の作成では、園児が理解しやすい語彙の選択や親しみやすい文体による文章構成、読み聞かせ練習では発音矯正や表現方法等に主眼をおいて指導した。また、こうした目標の設定により、受講生の学習動機の向上も期待した。

4．日本事情教育としての日本理解と自文化理解

通常授業で行なわれる日本事情教育は、教室内での活動という制限から擬似的なものにならざるを得ず、ややもすると机上の理解に止まってしまう傾向がある[(2)]。そこで多くの教育機関では、年に数回国内小旅行や施設訪問といった体験型の学習をカリキュラムに組み込むわけであるが、これも、運営側の負担やカリキュラム全体のバランスといった制約によって結果的に日本の周辺的な観察に止まらざるを得ないことが多い。

そこで、本授業では、日本社会への積極的な参加を促す場を提供することにより、より突っ込んだ日本事情教育の実現を目指した。特に今回は、その場を幼稚園に設定することにより、日本の教育システムの一翼を担う幼児教育がどのように行なわれているのかについて学ぶ場を提供した。

さらに、日本人学生（や同国の学生）と交流しながら、自国の昔話の紙芝居を作ることによって自文化に対する再認識や理解の深化を期待した。

III．実践報告

1．授業の概要

科目名：応用日本語ⅡＡ・Ｂ（留学生必須科目）

開　講：通年。週１コマ（90 分）。前期 13 回。後期 11 回。

受講対象：本科日本語課程に在籍する国文学科留学生（2・3 年生）。

構　成：前期 15 名。（うち、中国 12　台湾 1、スリランカ 1、バングラディシュ 1）
後期 4 名。（すべて中国。日本語課程を前期で修了した学生は対象外となる。）

交流対象：1）日本人学生（別府大学文学部国文学科 3 名）
2）日本人学生（別府大学文学部芸術文化学科 10 名程度[(3)]）
3）時間外預かり保育（通称「トトロ」）を受ける別府大学付属幼稚園児（15 名程度）

評　価：平常点及びレポート。

2．スケジュール

（1）前期

① オリエンテーション－授業の枠組みの提示（第 2 回）

本授業のように、受講生の日本語の学力差が比較的幅のあるクラスの場合は、いわゆる落ちこぼれや浮きこぼれ[(4)]あるいは一部の学生に過大な負担がかかるような状

表１　応用日本語Ⅱ・授業スケジュール

前期		後期	
第 1 回 (4/12)	(履修登録指導)	第 1 回 (10 /4)	オリエンテーション
第 2 回 (4/19)	オリエンテーション	第 2 回 (10/11)	読み聞かせ練習①
第 3 回 (4/26)	園児との予備接触	第 3 回 (10/18)	読み聞かせ活動①(園児との交流)
第 4 回 (5/10)	原稿作成① 市販紙芝居の読み聞かせ①	第 4 回 (10/25)	読み聞かせ練習②
第 5 回 (5/17)	原稿作成② 市販紙芝居の読み聞かせ②	第 5 回 (11/1)	読み聞かせ活動②(園児との交流)
第 6 回 (5/24)	紙芝居作成① 市販紙芝居の読み聞かせ③	第 6 回 (11/8)	読み聞かせ練習③
第 7 回 (5/31)	紙芝居作成② (芸術文化学科の学生との交流)	第 7 回 (11/29)	読み聞かせ活動③(園児との交流)
第 8 回 (6/7)	紙芝居作成③ (日本人学生〈芸術文化学科〉との交流)	第 8 回 (12/6)	紙芝居作成①
第 9 回 (6/14)	紙芝居作成④ (日本人学生〈国文学科〉との交流)	第 9 回 (12/13)	紙芝居作成②
第 10 回 (6/21)	読み聞かせ練習①(日本人学生〈国文学科〉との交流) 読み聞かせ活動①(園児との交流)	第 10 回 (1/10)	紙芝居作成③
第 11 回 (6/28)	読み聞かせ練習②(日本人学生〈国文学科〉との交流) 読み聞かせ活動②(園児との交流)	第 11 回 (1/17)	読み聞かせ活動③(園児との交流)
第 12 回 (7/5)	読み聞かせ活動③(園児との交流)		
第 13 回 (7/12)	うどんパーティ		

況（例えば、日本語のできる受講生が教室活動のほとんどをしてしまい、できない学生はただ傍観しているだけといった状況を指す。）が出ないように配慮しなければならない。D.W.ジョンソン他（2001）によれば、「運命を共有する」「互恵的な相互依存関係」に基づいた協同的な授業が生産性の高い授業運営を可能にするとし、その構築の方法として①共通目標の設定、②報酬や褒賞、③資料の共有、④役割の分担の 4 項目を挙げている（pp.73-74）。

そこで、筆者は 15 名の受講者を、学習者の日本語力や国籍等を配慮して 3 人ずつ 5 つのグループに振り分けた。そして、授業内の活動はすべてグループ単位で協同して行なうこと、また、成績評価もそのグループ単位で出すこと、従って、メンバーのうち 1 人でも課題の提出に遅れた場合は、メンバー全員の成績が出ないことをオリエンテーションで提示した。

また、それと同時に、本授業の目標は自作紙芝居の読み聞かせ活動を通して様々な日本人と交流すること、与えられた課題を確実にこなせば単位は保障されること[(5)]、素材となる昔話は各自で持ち寄ってグループで検討し 1 人 1 つ必ず紙芝居を作成すること、そして、作業の過程ではグループ内のメンバーで話し合って役割分担を決め、作業の負担が不均等にならないように配慮すること[(6)]を告げた。これは、先の D.W.ジョンソン他（2001）が掲げた 4 項目に対応している。

さらに、授業の様子は筆者のホームページで随時公開することを留学生に告げた。

② 活動の準備段階－園児との予備接触（第 3 回）

園児の言動は、成人のそれとはかなり異なる。従って、日本人の園児と接する機会がほとんどない留学生がいきなり読み聞かせをするのは困難が予想された。また、事前に園児に接しておくことは紙芝居作成の上でも大いに参考になると思われた。そこで筆者は紙芝居の読み聞かせに先立って、受講生全員を幼稚園に連れて行き、遊びを通して園児と交流させることを試みた。

実際、園児と接すること自体に戸惑いを感じる留学生がほとんどで、何とか接触できても、「子どもの日本語が速くて分からない。」「子どもが方言を話すのが新鮮だった。」といった意見が聞かれた。

③ 市販紙芝居の読み聞かせ（第 4 回～第 6 回）

第 4 回～第 6 回は、各グループから 1 名ずつ、従って 1 回あたり 5 名、幼稚園で市販紙芝居[(7)]の読み聞かせを行った。これを 3 回実施することで受講生全員が読み聞かせを経験した。また、読み聞かせの後は、30 分～ 40 分程度遊びを通して交流を図った。そしてその間、それ以外のメンバーは教室で原稿の作成と推敲を行った。

本活動の主なねらいは以下の 3 点である。

1）園児との関係強化
2）読み聞かせの練習
3）紙芝居で使われる日本語の特徴の理解

④ 原稿の作成（第 4 回・第 5 回）

通常、日本語教育における作文指導は、まず書く内容を決め、大雑把な構成を練り、その後、紙上での作文活動へと進む。このような指導の場合、確かに内容の決定と構成の構想は作文活動をする上で非常に重要な部分ではあるものの、書き出すまでに非常に時間がかかり推敲段階での指導が充分できないといったことも少なくない。

その点、ここでの原稿作成では、内容そのものは既に出来上がっているため、アウトプットと推敲に焦点をあてた作文指導ができるという利点がある。しかも、園児にも理解しやすく親しみやすい日本語で書くというのは、普段そのようなレベルシフトを学ぶ機会が少ない留学生にとっては非常に貴重な学習の機会でもある。

本活動の主な指導項目は以下の 4 点であった。

1）絵パネルにして 8 枚～ 12 枚程度の分量にすること
2）地の文を普通体（「だ・である」体）から丁寧体（「です・ます」体）に直すこと
3）難しい言葉、漢字 2 字の言葉や音読みの言葉は、簡単な言葉、訓読みの言葉に直すこと
4）長い文は、いくつかに切って短くすること

実際に留学生が書いた下記の推敲前の文章を見ると、聞き手を意識した文体操作が作文上の困難点であることがわかる。

カラスとキツネの物語

民間に伝わるカラスとキツネの物語に伝えられている。

ある日、カラスは外へ食べ物を探して、偶然においしい肉をみつけた。これはカラスによっていい事があった、だから、ことのほか機嫌がいいようだ、カラスは自分で探した肉を食べたがったから、人里離れた所の木の上に食べたとき、あいにくキツネこの木を通った。（原文ママ。中国男性）

なお、ある程度原稿が出来上がった時点で、ワードによる原稿の提出を義務付けた。日本語入力の経験がほとんどない彼らに学習の機会を与えるためである。

⑤ 紙芝居の作成－日本人学生（芸術文化学科）との交流（第 6 回～第 9 回）

本活動のねらいは、紙芝居の作成を通して日本人学生（芸術文化学科）と交流し相互理解を図ることである。受講生に対する主な指導項目は以下の 3 点である。

1）絵パネルのコマ割りの再検討。
2）ストーリーの説明。

3）自文化に関わる事柄（登場人物の服装、建物の様子等）の説明。

なお、受講生が作成した紙芝居は以下の通りである。（なお、括弧内の国籍はどこの国の昔話であるかを表す。）

「サルの夫婦」（中国）
「すごい絵をかく馬良」（中国）
「ライオンとアリ」（中国）
「おばすて山」（中国）
「かぼちゃの中のパーティ」（スリランカ）
「虎は死んでも」（中国）
「檀君神話」（韓国）
「子馬が川を渡る物語」（中国）
「くつの故事」（中国）
「きつねとカラスの物語」（中国）
「トラとうさぎの話」（バングラディシュ）
「千里の馬」（中国）
「三人の和尚の物語」（中国）
「五色のシカ」（台湾）
「よく考えよう」（ベトナム）

⑥ 読み聞かせ練習－日本人学生（国文学科）との交流（第10回･第11回）

本活動のねらいは、読み聞かせ練習を通して日本人学生（国文学科）と相互交流を図ることと、受講生のプレゼンテーション能力の向上である。指導の留意点は、日本語の発音に関することとプレゼンテーションに関することに分けられる。

1）発音に関すること
a）特殊拍の処理
b）清濁の区別
c）アクセント
d）イントネーション

2）プレゼンテーションに関すること
a）園児に語りかけるように話すこと
b）アイコンタクトを十分取ること
c）笑顔を絶やさないこと

なお、以上の項目に対しては、市販紙芝居の読み聞かせ（第4回～第6回）でも、筆者による指導や相互練習の中で同様に注意を喚起した。

⑦ 幼稚園での読み聞かせ活動（第10回～第12回）

第10回～第12回は、先の③と同様、1回あたり5名、3回のローテーションで各自1回ずつ自作紙芝居の読み聞かせを行った。

読み聞かせは、「まず始めに園児を全員集め、その前で順次2名の留学生に読み聞かせをさせた後、園児を3つのグループに分け、それぞれに1名ずつ留学生をあてがって読み聞かせをさせるパターン」と、「始めから園児を5つのグループに分け、それぞれのグループで1名ずつが読み聞かせをするパターン」を採った。前者は、比較的園児が読み聞かせに強い興味や関心を持っている場合の対応であり、後者は園児が読み聞かせにあまり関心がなく、他の遊び（例えば園庭で遊具を使った遊び等。）により強い関心を持っている場合の対応である。いずれの場合も15分から30分程度で読み聞かせは終わった。その後、20分程度、園庭等での遊びを通して園児との交流を図った。

活動後、留学生からは以下のような感想が聞かれた。

> 例えばね、わたしが読むでしょ。『かぼちゃの船が川に流されてしまいました。』ってね。そしたら、こどもがすぐに『おじいさんとおばあさんは、本当に困ってしまいました。』って言う。私が読むところ、子どもが先に分かって言っちゃう。だから、私、次読めないでしょ。仕方がないから『そうね。困っちゃったね。おじいさんとおばあさん、これからどうするかなあ？』って言う。そしたら、次に進める。これは難しい。（スリランカ男性）

紙芝居の読み聞かせというのは、ただパネルに沿って読めばいいというものではない。聞き手の反応に臨機応変に対応しながら進めていかなければ成立しないものなのである。

⑧ うどんパーティ（第13回）

最後に、授業に関わった学生で交流パーティを行った。

（2）後期

① オリエンテーション（第1回）

後期は、前期15名とは違って受講生が4名（男子学生1名、女子学生3名。すべて中国）であったため、活動も小規模にならざるを得ないが、極力幼稚園を訪問する機会を減らさないよう、後期の予定を受講生に告げた。

また、4名を2名ずつの2グループにわけ、前期と同様にグループ単位で活動させた。

② 読み聞かせ練習と読み聞かせ活動（第2回～第7回）

各グループから1名ずつ計2名を幼稚園に連れて行き、読み聞かせ活動を行った（〔写真1〕参照）。その際、前期で他学生が作成した紙芝居を使って行うため、事前に読み聞かせ練習をする必要があった。従って、それらの留学生は、他の2名が幼稚園で読み聞かせをしている間、教室で各自次回に備えて読む練習を行った。

また、読み聞かせの後は、前期と同様、遊びを通して園児と交流を図った（〔写真2〕参照）。

写真１

写真２

③ 紙芝居作成（第８回～第10回）

前期で作成した紙芝居を一通り使用したこと、紙芝居の作成にあまり時間がかけられなかったことなどから、各グループ１つずつ新たに紙芝居を作成した。作成した紙芝居は以下の２点であった。

「猫が魚を釣る話」（中国）

「虫の王」（中国）

④ 新作紙芝居の読み聞かせ活動（第11回）

これまでと同様に、読み聞かせ活動を行った。

３．考察ー受講生のレポートから

（１）本活動は、異文化理解に有効だったか

前期は、「本活動は、異文化理解に有効だったか。」というテーマでレポートを課した。レポートの内容から、受講生15名全員が有効だったと回答している。以下、「読み聞かせ活動について」「日本人との交流について」「日本語学習について」「異文化理解について」の観点から考察を試みる。なお、学習者のレポートの文は、すべて原文通りである。

（２）読み聞かせ活動について

相手が園児であるとはいえ、日本人の前で自分の日本語を晒すことは、留学生にとってはかなりのプレッシャーであったようだ。特に今回の留学生は初級から中級レベルで、まだ自分の日本語に自信が持てるレベルではないことから考えると当然だと言える。しかし、読み聞かせの経験や園児との継続的な交流から次第に自信をつけ、活動に対する意義を彼らなりに見出している様子が窺える。

(1) いざ本番になると、相手は子供だと言っても、やはり緊張してなんとか無事で終わったか、うまく伝えたかどうか、今でも不安である。（中国男性）

(2) 幼稚園いく前、全然おもしろくないと思う。でも授業終わ（っ）たら、自分理解（＝自分が知っている？）の文化伝う。子供たちから日本の文化理解する。（中略）文化と文化の交流、本当にいい授業だ。（中国男性）

(3) 今度（＝今回？）の発表は最高ではなくても成功だと思います。（中国女性）

さらに、各自で課題を設定して積極的に取り組んだ様子も窺える。

(4) 子どもの前でゆっくりと、子どもの目を見ながら感動するように話して行きました。（スリランカ男性）

(5) いい昔ばなしを発表（する）ために、自分の家で繰り返し練習しました。発音やアクセントや表情などが全部重要です。（中国女性）

活動の初期における受講生の関心事は、専ら「いかにして正しい発音で読むか。」という点にあり、筆者もそこに力点を置いた指導を行っていた。しかし、実際に園児の前で読み、彼らの反応を見るにつけ、次第に正確な発音だけでなく、「いかにして魅力的に語るか。」という点に受講生の関心は広がっていった。なぜなら、たとえ正確な発音で読んでも、園児の心をひきつける魅力的な語り口でなければ、紙芝居の途中でも園児は平気で「はい、おしまい。」と話を中断し、他の遊びに心を移してしまうからである。

この実体験は、語ることの難しさを受講生に強烈に印象付け、真剣に取り組まざるを得ない状況に否応なく引きずり込み、園児の期待に応えるべくより主体的・積極的な授業参加へと導いていった。

受講生のこうした取り組みは、園児の肯定的な反応、すなわち留学生の話を真剣に聞くという態度によって報われ、その結果、受講生は日本語学習や異文化接触に対して肯定的な感情を抱くようになったと考えられる。

（3）日本人との交流について

1）園児との交流

これについては、最初に出会ったときの印象や園児の予想外の言動に対する戸惑いについて書いたものが多かった。

(6) 子供たちと交流したとき、私の日本語すごく下手だろうと思った。子供の言葉が難しいのではなくて、私たち今勉強している日本語とぜんぜんちがう。（中国男性）

(7) 子どもたちの考え方は、本当難しい。（中略）今の子供たちは、私が思うより大人だった。（中国女性）

(8) 日本の子供はみんないたずらである。男の子とか女の子とか私はあの時（＝初めの頃）は気持ちとても悪いだった。どうすればいい？どう交流しますか？全部わからない。（中国女性）

しかし、そういった戸惑いも交流の中で徐々に解消し、やがては肯定的な態度へと変化する。

(9) 子供たちは紙芝居を見ると、（中略）「自分で書いた？」と言った。「好き」と言った。いろいろな声がでた。私はとてもうれしかった。自分の心血を注いだ作品、子供たちは好きだから、苦労したかいがあった。（中国女性）

2）日本人学生との交流

普段、日本人学生と接する機会が少ない留学生にとって、自文化を日本人学生に日本語で説明し、理解してもらえることは、非常に大きな喜びにつながる。また、それが契機となって共通の話題や趣味を見出したとき、一時的にしろ相手に対する心理的な壁は低減されるようだ。

(10) 私は（絵を描くのが）下手だから、専門絵画の人に手伝ってもらい、その時いろいろな問題があった。例えば、手伝う相手は日本人だ。中国の昔の人の服や、髪形や、家を全部は知らない。みんないろいろ説明してついにわかった。（中国女性）

(11) この昔ばなしは中国のはなしだから日本の学生は理解ができません。絵が描かれません。私は日本の学生に昔ばなしの内容を介紹します。私は日本の学生と昔ばなしを交流するとき日本の知識を知っています（＝得ます？）。（中略）この知識は学校で学ばない知識です。そして日本の学生は中国の文化を了解しました。日中文化を深めます。これはとてもうれしい（中国女性）

(12) 私は日本語課程にいるので、日本人と接触することがあまりない。日本人と接触するチャンスがあれば、日本人学生から日本の文化と風俗を教えてもらいたい。以前、私は日本の漫画が大好きだ。日本人学生と交流するあいだ、いろいろなにほんの芸術についての問題を日本人学生から教えてもらった。私にとって本当にうれしかった。（中国男性）

これらから窺えることは、多くの受講生が日本人との接触そのものに新鮮な驚きや喜びを見出している点である。これは本プログラムの成果の一つというよりは、むしろ留学生が普段交流の機会に乏しい教育環境に置かれていることを示すものであり、今後の本学における留学生教育のあり方を考える上で大きな課題を我々に示していると思われる。

（4）日本語学習について

日本人との交流が学習動機の向上及び肯定的な態度の育成に大きく貢献している様子が窺える。このことは、従来の日本語集中プログラムが単に「日本語学習」という観点だけでなく、「異文化学習」という点においても検討の余地があることを示唆するものと思われる。

(13) 毎日学校に来て朝から2：30まで日本語ばかり勉強していた私に、この活動はふつうの日本語の勉強と違ってとても楽しい日本語の勉強でした。始めは日本人の子どもに日本語の絵本を読んであげました。その時、新しい日本語の言葉を習ったり、日本の昔話を知ったりして、とても楽しかったです。（スリランカ男性）

(14) もしいつもこんな授業方法で教えければ、みんなの日本語能力が早く上手になるかもしれない。（中国女性）

(15) 子供はかわいいの面がある。交流の時は、返事がある。ある時、子供が質問がある。もし答えできる。心から嬉しい。できない時一生懸命日本語を勉強します。（中国女性）

(16) 日本の学生と雑談するとき自分の日本語が上手ではないと感じます。日本語を学ぶのは一番重要なことだと思います。（中国女性）

(17) 今のクラス（＝日本語課程）に、みんな中国人なので、しゃべっている時、中国語を使う。日本語を話すチャンスがほとんどない。（中国女性）

我々教師は、普段より学習者の学習動機を引き上げるべく、様々に工夫を凝らした活動を日々実践している。しかし、その大半は教室という枠組みの中で正に日本語学習そのものに焦点が置かれたものに終始してはいないだろうか。そうした教える側にとっての暗黙の前提に対する一種の息苦しさ、そして、それから解き放たれた解

放感とそこで新たに生まれる学習意欲を彼らのレポートから垣間見ることができる。

（５）異文化理解について

一連の体験学習を通じて、日本社会に対する理解が深まったことは言うまでもないが、自文化への再認識や異文化理解の意義にまで言及が進んでいる。

（18）一番びっくりしたのは日本の学校に子供たち少ない。（中略）こどもがいないとこれからさきとてもたいへんだと思います。
（バングラディシュ男性）

（19）昔話についていろいろなことをともだちと話してみたら、スリランカの昔話と思っていたほとんどの昔話はスリランカの昔話ではなかった、と言うことがわかりました。（スリランカ男性）

（20）今回の授業を通じて、自己、自分の国の文化を再理解することもできたと私が（は？）考えている。自分たちの文化を（の？）理解が深まるとともに、異文化との出会いの大切さがより深く理解してくるのではないかと思う。（中国男性）

また、この活動は、自文化対日本文化という枠組みを越えた多文化理解の場をも留学生に提供している。

（21）私の昔話は韓国のである。私は韓国人ではないので、韓国の昔話は中国人の私にとって、ほんとうにとまどった。運よく、私の韓国の友たちがいる。したがって、韓国の友たちから昔話を教えてもらった。韓国の友たちと交流するときに昔話だけではなくて、たびたび韓国の文化と風俗を教えてもらった。そうすると、韓国の文化と風俗を全部ではなくても少しは理解した。
（中国男性）

さらに、従来の教育プログラムに問題点を投げかける、以下のコメントに注目したい。

（22）活動の中から、本の中にはないたくさんの知識を勉強することができた。さらに、異文化を身にしみてよく分かった。（中国男性）

（23）日本に来てから、いろいろな国際交流の活動に参加したのに、今回のような異文化を深刻に了解するチャンスはあまりないと思う。（中国女性）

（21）は、翻って考えれば、従来の日本語集中プログラムが教室内活動に偏ったものであることを暗に示すものであり、（22）は、国際交流を目指した活動がややもすると表面的なものに終始してしまう（少なくとも留学生にそのような印象を与えてしまう）ことを示しているのではないだろうか。

Ⅳ．授業を超えた地域交流への展開

活動の基礎を授業に置いていたこの読み聞かせ活動は、やがて授業という枠を越えて他の分野にも広がっていった。ここでは、英会話教室 Mutsuko’s English Club との交流会（Storytelling & Party in Autumn）を紹介する。

１．実施までの経緯

この交流活動が実現したのは、前期の読み聞かせ活動が地域情報番組や地元紙で紹介されたことがきっかけであった。

実施に先立って２回の打ち合わせが行われた。１回目の参加者は梶谷氏（主催者）、バングラディシュ男子学生、そして筆者であった。２回目の参加者は梶谷氏、留学生３名（スリランカ男子学生、バングラディシュ男子学生、中国女子学生）、そして筆者であった。

２．交流活動の概要

日　時：2005 年 11 月 6 日（日）　13:30 ～ 16:30
場　所：さんさん館２階・教養文化室（大分県宇佐市）
主催者：梶谷睦子（英会話教室 Mutsuko’s English Club）
参加者：70 名程度。主に Mutsuko’s English Club に所属する小学生から高校生（日本人）及びその父兄。
式次第：一、子供達による英語絵本＆紙芝居の Storytelling
“Brown Bear, Brown Bear, What do you see?”
“Where are you going? To see my friend!”
“A Color of His Own”
“The Very Hungry Caterpillar”
“My Beautiful Child”
一、別府大学の留学生による日本語紙芝居の読み聞かせ＆お国紹介
「かぼちゃの中のパーティ」（スリランカ）
「子馬が川を渡る物語」（中国）
「トラとうさぎのおもしろい話」
（バングラディシュ）
一、ゲーム＆アクティビティ
一、パーティ

３．活動の内容

（１）子供達による英語絵本＆紙芝居の Storytelling

“Brown Bear, Brown Bear, What do you see?” “A Color of His Own”及び“The Very Hungry Caterpillar”は Mutsuko’s English Club に所属する小・中学生による絵本（英語）の読み聞かせである。

“Where are you going? To see my friend!”は先の小学生

と留学生共演による英語劇である。
“My Beautiful Child”は、英文を中学生が、その日本語訳を留学生が交互に朗読した（写真３参照）。
（２）別府大学の留学生による日本語紙芝居の読み聞かせ＆お国紹介
まず始めに、読み聞かせをする留学生の国の紹介を、予め調べてきた小学生が発表した。次に、留学生による紙芝居の読み聞かせを行った（写真４参照）。その後、参加者による質疑応答が行われた。
（３）ゲーム＆アクティビティ
参加者全員が大きな輪になり、様々な国の言葉で自己紹介や簡単な会話をしながら、風船を隣に渡していくゲームを行った。
（４）パーティ
手作りの料理を用意して、参加者全員による立食パーティ、交流会が行われた。

写真３

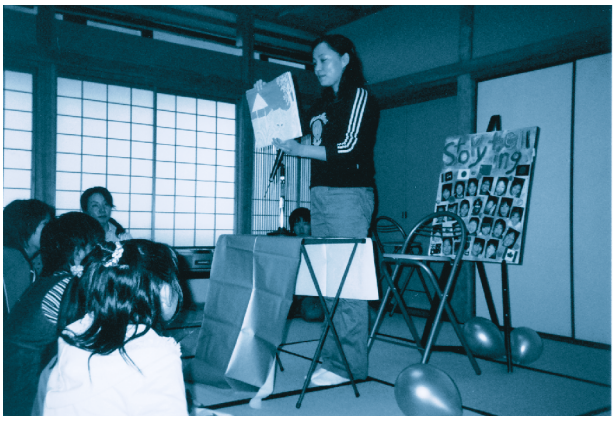

写真４

４．考察

今回の活動は、単により多くの日本人に接する機会が得られたというだけでなく、メディアを通じて自分たちの活動が広く社会に知られ、それがきっかけとなって学外の日本人から反応があったことにより、その活動の意義や彼らの存在意義を彼ら自身がより一層実感できた、極めて貴重な経験となった。このことは、彼らの持つ自国の情報が日本人の心を引き付ける価値ある情報であるということ、そして、そのような情報を提供することが地域社会と関わっていく一つの方途であるということを留学生自身に認識させたようである。

Ⅴ．まとめ

今回の試みは、閉鎖的な生活環境を強いられがちな留学生に、①授業の枠組みの中でできるだけ多くの日本人との継続的な人的交流の場を提供すること、②通常のプログラムとは違った形で日本語・日本事情学習の場を提供すること、③留学生が文化情報資源として地域社会にどこまで貢献できるか、その可能性を探ること、を主な柱として実施したものであった。特に③については、彼らの平常の取り組みやレポートの内容、さらにはMutsuko’s English Club との交流会に見られる地域への広がりから考えて、可能性は十分あると思われる。

今後の課題としては、このプログラムを維持・発展させるための人的ネットワークを充実させること、日本人学生と交流しやすい環境を整備すること、さらには、これらの活動が、日本人や地域社会に対してどのような効果をもたらすのか、日本人の立場から活動の意義を探ること、などをあげることができる。

以上のことを踏まえながら、留学生の持つ知的財産を地域社会に提供することによって彼らの存在意義を高める方途を模索しながら、地域における多文化共生社会の実現のために何ができるか、さらに考えを深めていきたいと思う。

なお、本活動の詳細は、筆者のホームページで公開しているので参照してほしい。

篠崎大司研究室（http://www.kanjifumi.jp/jouhoushigen-top.html）

謝辞

本授業を実施するに当たって別府大学付属幼稚園（前園長：恒松栖先生）の先生方やトトロ担当の神先生、また、宇佐市での交流会では梶谷先生、短期大学部食物栄養科村田先生に多大なご協力をいただきました。ここに改めて感謝の意を表したいと思います。

注

（１）別府大学には、これとは別に「別科日本語課程」がある。
（２）この点に対して倉地（1998）は「異文化というものを、暗々裡に学習者自身の現実とは全く相反する、自分たちとは隔絶した世界内存在として認識させてしまうという点で、大きな問題が残るのである。（pp.75-76）」と、疑似体

験型学習の危険性を指摘している。

（3）若干名の留学生を含む。

（4）ここでは、「他より高い学力を身に付けた留学生が、授業に物足りなさや疎外感を感じている状態。」と定義する。

（5）授業を進めていくにつれ、紙芝居の作成や日本人との交流そのものが彼らにとっての精神的な満足へとつながり、当初設定していた単位の保障という報酬は、次第に重要ではなくなっていった。

（6）D.W.ジョンソン他（2001）は、教師が学生の役割を明確に規定することを奨励しているが、今回はそこまで徹底した措置はとらずある程度受講生の裁量に任せ、机間巡視をする中で調整を図った。

（7）なお、幼稚園で扱った市販紙芝居は以下の通りであった。

「こびとのくつやさん」
「桃太郎」
「てぶくろを買いに」
「もうおねしょしません」
「メッカの花」
「しりとりあそぼ」
「かさこじぞう」
「いたずらおばけ」
「おおきなかぶ」
「もりの消防団」
「ぐーんとのばせ」
「バッタ君のかくれんぼ」
「いじわるねことねずみくん」
「ぐりとぐら」
「そらまめくんとめだかのこ」

参考文献

有田佳代子（2005）「地域の「国際化」と大学の貢献－留学生交流を中心として－」『敬和学園大学研究紀要』14　pp.181-197

加賀美常美代（2001）「留学生と日本人学生のための異文化間交流の教育的介入の意義」『三重大学留学生センター紀要』第3号　pp.41-53

倉地暁美（1998）『多文化共生の教育』剄草書房

坪井　健（1999）「留学生と日本人学生の交流教育」『異文化間教育』No.13 pp.60-74　アカデミア出版会

横田雅弘（1991）「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』No.5 pp.81-97

横田雅弘他（2004）『留学生アドバイジング』ナカニシア出版

D.W.ジョンソン他（2001）『学生参加型の大学授業－協同学習への実践ガイド』玉川大学出版会